

国際シンポジウム  
『プレザンス・アフリケーヌ』研究  
超域的黒人文化運動の歴史、記憶、現在

日時：2017年8月23日・24日

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（予定）

この文章は、東京外国語大学アジア・アフリカ文化研究所2015年度共同利用・共同研究課題「『プレザンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために」(<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp216>)の一環として開催予定の国際シンポジウムの告知および発表者の公募です。告知・公募はフランス語および英語でもなされており、『プレザンス・アフリケーヌ』誌の編集長ロミュアルド・フォンクア氏（パリ第4大学）をはじめ、海外から多数の研究者が参加する予定です。

以下、開催にあたっての研究背景と趣旨説明を記します。お読みくだされば幸いです。

## 1. シンポジウム開催にあたっての研究背景

### 本研究の概要

本研究は、黒人文化総合誌『プレザンス・アフリケーヌ(*Présence Africaine*)』を対象にする。1947年にアリウン・ジョップにより公刊され、現在まで続くこのフランス語圏の雑誌は、黒人知識人の主要な言論媒体として、とくに1950年代の脱植民地化期に重要な役割を果たした。本研究は、『プレザンス・アフリケーヌ』の再読を通じて、20世紀半ばに世界の黒人知識人が生み出したネグリチュードを始めとする思想・運動を再評価するとともに、これを手がかりとして、グローバル化がかつてなく進展した冷戦崩壊後の現代における、新たな政治と文化の関係を構想する。アフリカとカリブ、仏語圏と英語圏、文化人類学と文学にまたがる領域横断的な共同研究の試みである。

### 研究の目的

本研究の目的は、第一に、1950年代のアフリカ脱植民地期において『プレザンス・アフリケーヌ』が果たした役割を解明することにある。そのために本研究では1955年から刊行される第二期を対象とし、二度の黒人芸術家・作家会議の記録に注目する。第二の目的は、脱植民地期の同誌上の議論が独立後の政治状況のなかでどのように発展ないし解消されたのか（あるいは断絶したのか）を見定めることにある。たとえば1950年代の民族詩論争のなかで問われた植民地出身の作家は何語で書くのかという問いは、いまだにその効力を失っていないだろう。独立

の理念が困難に直面するなかで、アフリカの未来をめぐる文化人の真摯な議論は、決して過去のものではないのだ。本研究では、文化論が政治意識に直結する、植民地出身の知識人たちの議論から、冷戦崩壊後のグローバル化時代を生きる私たちが継承すべきものを探ってゆく。

## 研究の重要性

『プレザンス・アフリケーヌ』は、1947年から今日までのアフリカに関する人文学・社会科学の言説を長期的スパンにわたって見渡すことのできるきわめて貴重なコーパスである。そのことは、この雑誌が、人文学・社会科学にまたがる広範かつ膨大な論考を含むことを意味する。本プロジェクトの意義は、まさしくこの点、すなわち、雑誌の多様性を分析するためには、異なるディシプリンの研究者による協同が必要であるという点にある。このために本研究班は人類学から文学まで多様な研究者で構成され、それぞれの専門性を活かして課題遂行に当たる。

(ポスト) 植民地の課題の集団討議の場である『プレザンス・アフリケーヌ』の検討により、混迷する現代世界を読み解き、政治と文化を多元的に展望する、新たな学の構想が拓かれてくると予想される。また、翻訳を含んだ論文集の出版および国内外のシンポジウムを通じてアフリカ地域研究のみならず、人類学・文学をはじめとする文化研究全般にインパクトをもたらすことが期待される。

## 2. 国際シンポジウムの趣旨説明

本シンポジウムでは、学際的観点（文学、人類学、民族学、心理学、哲学、歴史、政治学、哲学、法学、教育学等）から、アフリカにかんする歴史記述や、奴隷制と植民地問題と 20 世紀後半の脱植民地化運動にかんする錯綜した眼差への接近を試みる。

本シンポジウムは、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパ諸大陸間での記憶と歴史（複数の記憶と歴史）をめぐる問題を扱うことになる。なぜ記憶と歴史なのか。それはピエール・ノラが次のように述べるとおりである。

「記憶とは生であり、いつでも生きている人々の集団が担っているものである。記憶とは、それが生であるという意味で、絶えず変わりゆく。記憶とは、思い起こすことと忘れてしまうことの弁証法を受け入れ、絶えざる変化に気づかず、傷つきやすいほどにいかようにも使われ、操作され、長く潜伏していることも、急に甦ることもできる。歴史とは、もはや存在しないものを、いつでも不完全で不確かなかたちで再構築したものだ。記憶とは、いつでもアクチュアルな現象であり、永遠の現在に結びついた、生きられた絆だ。歴史は過去の [さまざまな] 表象のひとつである」<sup>1</sup>。

あらゆる歴史は、歴史を担う文脈の産物である。抑圧されてきた人々の意識の「目覚め」のうちで『プレザンス・アフリケーヌ』はどんな役割を果たしたのか。アフリカ諸社会の歴史を

---

<sup>1</sup> Pierre Nora, *Lieux de mémoire, tome 1*, Paris, Gallimard, Collection Quarto, 1997.

書く際に必要な新しい形式とはいかなるものか。『プレザンス・アフリケーヌ』はどのような基準でもって疎外からの脱却をもたらすのか。ネグリチュードの位置づけはどのようなものか。マルク・ヴァンサン・オウレットとロミュアルド・フォンクアの言葉を借りるなら、「『プレザンス・アフリケーヌ』は遺産でもあり誕生でもある」<sup>2</sup>。そのために同誌は黒人文学運動の歴史のなかでどのように自らを位置づけ、また「同時に、一種の学術言説を築きつつもそうしたものを免れるのか」。『プレザンス・アフリケーヌ』はアフリカ、アメリカ、ヨーロッパの圏外でどのように把握されるのか。

ニコラ・バンセル、パスカル・ブランシャール、サンドリヌ・ルメールの表現を使えば、「植民地の亀裂」の際立った諸要素を辿りながらも、植民地にまつわる過去の表層的な認識や単純な非難に終始することなく、この植民地にまつわる過去をいかに現在へ投錨するのか。こうしたアフリカの現代史をどのように書くのか。このことは「黒人」のイメージの社会的表象、たとえば芸術、文学、詩、音楽やダンスなどで繰り返される偏見やステレオタイプにかんする考察にも通じている。こうしたテーマをめぐる『プレザンス・アフリケーヌ』の問題提起はいかなるものか。『プレザンス・アフリケーヌ』は知識人の運動にいかなる影響を与えるのか。

植民地にまつわる過去の考察を通じて、さまざまな文明の出会いを検討することも問われている。本シンポジウムは、『プレザンス・アフリケーヌ』の偉大な創設者たちを通じて、主要な概念を再考する機会である。具体的には、「ネグリチュード」（セゼール、サンゴール）、「クレオール化」（グリッサン）、「意識化」（シクルマ）、アフリカの「西洋化」、グローバル化、ユーラフリック［ヨーロッパとアフリカの統合構想］、パンアフリカニズム、「植民地心性」［植民地化の結果（旧）植民地住民が劣等感を抱くような心の在り方］、「植民地住民のコンプレックス」、アフリカ中心主義、等である。『プレザンス・アフリケーヌ』は、アフリカ大陸および（アメリカ、カリブ海、ヨーロッパの）ディアスポラのうちで働く、さまざまな文化力学を、この70年、どのように伴ってきたのか。大西洋や太平洋を経由してカリブ海から地中海までを横断する、「システムの思考」を断念させるための無数の抵抗と戦い、尊厳の獲得の道りが問われることになる。『プレザンス・アフリケーヌ』はさまざまな政治運動に対してどのような意味を認めるのか。第二次世界大戦終結後の「独立」の時代に伴い、1950年代以降、アフリカ大陸の住民およびディアスポラは、何をアイデンティティの再獲得の印としてきたのか。旧宗主国との新たな関係をどのように築くのか。

本シンポジウムは、奴隷制とその後遺症から出発しながら、アメリカス、カリブ海、ヨーロッパ、アフリカのブラック・ディアスポラの変遷についても検討する機会となる。もちろん、

---

<sup>2</sup> Marc-Vincent Howlett et Romuald Fonkoua, « La maison Présence Africaine », *Gradhiva* [En ligne], 10 | 2009, mis en ligne le 04 novembre 2012, consulté le 26 décembre 2016. URL: <http://gradhiva.revues.org/1537>; DOI: 10.4000/gradhiva.1537

移住や亡命の現象や、逃亡者の文学といった主題もここにはふくまれる。

『プレザンス・アフリケーヌ』の変遷そのものを仔細に検討することから出発しつつ、この雑誌が、メディア空間のなかでどのような位置を占めるのか、またアフリカ以外の世論（とくにヨーロッパやアメリカス）においてどのように受容されているのかを問うこともできる。

発表の機軸については限定せずいくつか考察の題材を示しておく。

- ✓ 政治
- ✓ 社会
- ✓ 経済
- ✓ 教育
- ✓ アート、文化、映画、ダンス
- ✓ 詩、小説、戯曲、中短編などの文学
- ✓ 『プレザンス・アフリケーヌ』の重要人物。Alioune Diop, Aimé Césaire, Léopold Sédar Senghor, Glissant, Cheikh Anta Diop, Léon-Gontran Damas, Kwame Nkrumah, Edouard Glissant, Christiane Yandé Diop, Frantz Fanon, Jacques Rabemananjara, Chinua Achebe, Françoise Balogun, Roger Bastide, Clarke John Henrik, Maryse Condé, René Depestre, Pathé Diagne, Marcel Griaule, Ibrahima Baba Kaké, Wole Soyinka, Paulin Soumanou Vieyra, Richard Wright, Jean Suret Canale, 等々。
- ✓ 黒人芸術家作家会議と他の文化運動
- ✓ 黒人芸術フェスティバル
- ✓ ディアスポラ、移住、ユーラフリック、パンアフリカニズム等
- ✓ 非同盟諸国運動
- ✓ 地政学、冷戦体制
- ✓ ジェンダー、世代問題
- ✓ スポーツ、余暇
- ✓ 植民地化、脱植民地化、ポスト植民地
- ✓ 雑誌空間のなかの『プレザンス・アフリケーヌ』の位置：『プレザンス・アフリケーヌ』の受容
- ✓ 創設者から継続者へ：『プレザンス・アフリケーヌ』の変遷
- ✓ グローバル化と地域社会
- ✓ 頭脳流出
- ✓ 身体、健康、可傷性、障害、病気
- ✓ 戦争と平和

## 募集方法

発表言語は英語、フランス語、日本語のいずれかです。まず、これらの言語により、ワード形式 (.doc) かリッチフォーマットテキスト (.rtf) にて、発表の要旨を執筆し、ご提出くださ

い。分量は、英語・フランス語の場合は5000文字、日本語の場合は2000文字を上限とします。なお、日本語での発表には通訳がつく予定です。そのため日本語による発表希望者は、最大で2000文字以内の日本語での要約のほか、英語かフランス語での要約の提出もお願いいたします（その場合は日本語要約の全訳でも、あるいは日本語要約の概要でもかまいません。概要の目安は200単語前後とします）。

要旨の形式は自由ですが、次の点を忘れずお書きください。氏名（複数の場合はそれぞれの氏名）、所属機関と身分、連絡先（メールアドレス、電話番号、住所）、タイトル、問題設定、方法、分野、5つのキーワード。可能であれば依拠する理論、期待される結果などもお書きください。

ご提出いただいた発表の要約に基づき、7カ国16名の研究者からなる学術委員会（後述）が厳正な審査を行います。

送付先は以下となります。

アジェ・ロモ=ミヤジオーム（ストラスブール大学）lomo@unistra.fr

佐久間寛（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）sakumayutaka@aa.tufs.ac.jp

中村隆之（大東文化大学）nakamuu@ic.daito.ac.jp

上記3人宛にお送りくだされば幸いです。

ご不明な点がございましたら、佐久間および中村宛までどうぞお気軽にお問い合わせください。

**募集期限 2017年3月15日**

#### スケジュール

- ✓ 2017年3月25日：希望者への結果通知
- ✓ 2017年3月30日：シンポジウムの暫定プログラムの告知
- ✓ 2017年4月20日：シンポジウム参加者予定者の参加の意志確認の期限
- ✓ 2017年4月30日：プログラムの確定と参加者の登録
- ✓ 2017年6月15日：発表原稿の送付（25,000から30,000文字。日本語は10,000字以内）
- ✓ 2017年8月23、24日：シンポジウム開催

・シンポジウムに関する詳細は後日以下のサイトに掲載予定。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja>

#### 連絡先

中村隆之（研究課題代表）、フランス語圏文学専攻、大東文化大学

佐久間寛（研究課題副代表）、人類学専攻、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

Aggée Célestin Lomo Myazhiom, Professeur invité à l'Université des Langues Etrangères de Tokyo,

ILCAA, Japon ; Maître de conférences HDR en sociologie, UMR 7367 Dynamiques Européennes, CNRS-Université de Strasbourg

#### 学術委員会

Kofi Adu Manyah, Senior Lecturer en sciences du langage, Département des Langues Modernes, Kwame Nkrumah University of Science and Technology, Kumasi, Ghana

Ramatoulaye Diagne Mbengue, Professeur des Universités, Département de Philosophie, Université Cheikh Anta Diop, Dakar, Sénégal

Romuald Fonkoua, Professeur de littérature francophone, Directeur du Centre International d'Etudes Francophones (Université de Paris IV, Sorbonne), Fellow Professor à l'Ecole française de Middlebury College (USA), Directeur de publication de la Revue *Présence Africaine*

星埜守之、フランス文学・フランス語圏文学専攻、東京大学

Alain Kiyindou, Professeur des Universités en Sciences de l'information et de la communication, Université Bordeaux Montaigne ; Directeur-adjoint de l'Equipe d'Accueil (EA 4426) MICA, Président de la Société Française des Sciences de l'Information et de la Communication

Aggée Célestin Lomo Myazhiom, Professeur invité à l'Université des Langues Etrangères de Tokyo, ILCAA, Japon ; Maître de conférences HDR en sociologie, UMR 7367 Dynamiques Européennes, CNRS-Université de Strasbourg

Corinne Mencé-Caster, Professeure des Universités en sciences du langage, responsable de la composante RELIR de l'Equipe d'Accueil 4080, Université de Paris IV Sorbonne (France) ; Présidente honoraire de l'Université des Antilles et de la Guyane

中村隆之、フランス語圏文学専攻、大東文化大学

小川了、人類学専攻、東京外国語大学（名誉教授）

Charles-Romain Mbelé, Professeur des Universités en philosophie, Ecole Normale Supérieure, Université de Yaoundé 1, Cameroun

佐久間寛、人類学専攻、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

Roger Somé, Professeur des Universités en ethnologie, Département d'ethnologie, UMR Dynamiques Européennes, Université de Strasbourg

砂野幸稔、アフリカ文学専攻、熊本県立大学

Dominic Thomas, Directeur du Département d'études françaises et francophones et Professeur de littérature comparée à l'Université de Californie à Los Angeles (UCLA), Etats-Unis

Joseph Tonda, Professeur des Universités en anthropologie et sociologie, Université Omar Bongo, Libreville, Gabon

吉田裕、英語圏文学専攻、東京理科大学

#### 大会実行委員会

廣田郷土、フランス語圏文学専攻、パリ第8大学

星埜守之、フランス文学・フランス語圏文学専攻、東京大学

中村隆之、フランス語圏文学専攻、大東文化大学

Aggée Célestin Lomo Myazhiom, Professeur invité à l'Université des Langues Etrangères de Tokyo, ILCAA, Japon ; Maître de conférences HDR en sociologie, UMR 7367 Dynamiques Européennes, CNRS-Université de Strasbourg

吉田裕、英語圏文学専攻、東京理科大学

小川了、人類学専攻、東京外国語大学（名誉教授）

佐久間寛、人類学専攻、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

砂野幸稔、アフリカ文学専攻、熊本県立大学